

心理的、文学的「故郷」

文人の 武蔵野

三浦朱門（1926～2017年）と武蔵野の関係をいろんな角度から述べてきましたが、ここでは、武蔵野への関心がどこからきたのか、というところをさぐってみたいと思います。

三浦には本格的な作家論もなければ評伝もなく、残念ながら正確な年譜もまだないと

三浦朱門 ⑨



都立立川高校。三浦は前身の東京府立第一中学校で学んだ（立川市で）

「言わざるを得ません。ですが、52歳までの「自筆年譜」が残

されています。生年の1926年には「赤ん坊」である自身を「小生」と呼び、「雑巾」に喩えるくだりがあるなど、小説家ならではの描写がみられる年譜です。

28年のところには、次のように記されています。「二歳の秋、武蔵境に越す。当時、このあたりは独歩の武蔵野の面影があり、ここで暮らし始めたのに、後に立川の中学に五年間通ったこともあわせて、このあたりに故郷という感情を持つ。」

浦はそこに「武蔵野の面影」を感じ、その記憶を終生もっていたようです。「立川の中学」というのは「東京府立第一中学校」（現・都立立川高校）のことで、年譜には、学校の様子が次のように記されています。

「先生も上級生も生徒をなぐることをしなかつたし、映画を見、飲食店に入りしつても——これが退学の理由になる学校が多かつた——大目に見てくれるのが有難かつた。また、受験勉強にかりたてることもされなかつたから、学校をサポート、好きな本を読むことができた。」

教師や上級生の暴力が今よりも当たり前の時代に暴力事件が起きなかつたのは、受験競争に参加することもなく、自由な学校だったからだと考えていた節があります。

三浦が「故郷」と呼ぶ武蔵野とは、地理的には武蔵境から立川あたりまでの範囲がその源にあり、心理的には自身を育んでくれた立川の旧制中学の気風であり、文学的には独歩の存在が大きかつたと言えるでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。